演習 1

D 班　A08CB013・A08CB062・A08CB117・A07CB096・A09CB501

同性の友人関係における自己開示による親密感と孤独感との関連について

－女子大学生の自己開示量の観点から－

Ⅰ．問題

青年期における対人関係では、特に友人関係は重要である。友人関係は、個人と個人の間の相互作用を基礎にして形成される、持続的かつ心理的結びつきである(安藤，1999)。友人の機能は、思春期、青年期においては親から自立が進んでいくため、親や家族以上に友人と過ごす時間は長くなっていき、心理的な支えの点でも重要な他者であるといえる。青年期に形成される友人関係に関して丹野・松井（2006）は、他の年代以上に友人関係が自己概念の形成や精神的安定といった内的適応の促進に果たしている役割の重要度が高いと述べている。友人関係に求めるものとしては安定感や安心感であり、それらを充足するためには、自己を開示することで相手に親密な関係を求め、こころの中にある孤独感を軽減することになると考えられる。

対人関係に関する自己開示に関しては、Jourard (1971)は、対人関係には相互理解が重要であり、自己開示を行うことにより、相互理解が増幅されるため、対人関係には自己開示が重要であると論じている。丹野・下斗米・松井（2005）らは、実際の対人関係において、関係の親密段階によって開示される領域や自己開示量が変化することが明らかにされ、自己開示は自分自身の弱点を晒すことにつながるため、深い領域の自己開示は、相互に信頼感を親密な関係にあることが必要であると述べている。大学生に対する調査を行った下斗米（1990）は、友人関係における自己開示量と親密段階の関連について検討し、開示される領域ごとに自己開示量を検討した結果から、親密度の高い段階では、社会態度・意見、恋愛、能力、人格、友人関係、身体・容姿に関する自己開示量が顕著に多いことを明らかにした。また、開示される領域ごとに自己開示量を検討した研究で榎本（1987）は、11 領域からなる自己開示質問表（ESDQ－44）を用いて、大学生を対象に、友人関係における自己開示量について検討し、開示される領域ごとに自己開示量を比較した結果、もっともよく開示されている領域は、知識に関する領域と思考に関する領域であり、開示量の少ない領域は性に関する領域、家族に関する領域、外見に関する領域であった。以上のように、自己を開示することは対人関係では重要であり、また相手との親密度により自己開示量も変化されると考えられる。

青年期の発達特徴として安藤（1999）は、Erikson が前成人期における発達課題として「親密－孤独」などが対象とされてきたと述べている。青年期には、孤独感を癒してくれる親密な人間関係が必要とされ、自己開示・親密と孤独感は深い意味合いをもつ関係性であるといえよう。

自己開示と孤独感との関連についての研究では、Chelune, Sultan, & Williams（1980）は女子大生を対象とした調査の結果、自己開示の意志と孤独感との間に負の関係があることを見出しており、自己開示の意志が低いほど、孤独感が高いという結果であった。更にBerg & Peplau（1982）は、大学生の男女を対象としたところ、女子においてのみ自己開示と孤独感との間に負の相関が認められたとして、自己開示の程度が低いほど、孤独感が強いという結果に至った。また榎本（1997）は、大学生を対象として、ESDQ－44とUCLA孤独感尺度を用いて研究を行ったところ、自己開示度の低い者ほど孤独感を強く持っていることを見出した。

これらの先行研究より、青年期の友人関係では、親密段階によって領域ごとの自己開示に変化が生じると示唆される。また、自己開示と孤独感との関連に関して、自己開示の程度により孤独感に影響をおよぼすと示唆される。

本研究では、女子大生の友人関係において各親密段階における自己開示の機能と、自己開示と孤独感との関連性について検討することは意義のあることと考える。

Ⅱ．目的

本研究では、女子大生の同性の友人関係を対象とした調査により、親密感と自己開示（自己開示量）との関連について検討することを第一の目的とする。さらに自己開示（自己開示内容）と孤独感の関連について検討することを第二の目的とする。

Ⅲ．仮説

第一に、友人関係における親密感が高いほど自己開示が高く、親密感が低いほど自己開示が低いと仮説を立てた。第二に、友人関係での自己開示が多いほど孤独感が低く、自己開示が低いほど孤独感が高いと仮説を立てた。

Ⅳ．方法

1．調査対象

愛知県内の私立女子大学生140名に質問紙を配布し、全回答者127名のうち、記入漏れなどの回答に不備のあった回答者7名を除き、120名を有効回答数とした。有効回答者の平均年齢は19.60（±1.65）歳であった。

2．測定尺度

以下の質問項目からなる質問紙の回答を求めた。

(1)　自己開示量尺度

a．フェイスシート

調査対象者の年齢、1人の人物の想定を求め、その人物の名前のイニシャルと年齢の記入を求めた。

知人の想定に関しては、「大学に入学してから知り合った人で、日常生活で関わり合い

の多い同性の人間を1人想定してください」と教示文を呈示し、1人の人物の想定を求め、その人物の名前のイニシャルと年齢を回答させた。これは、今後の質問に対し、想定人物を明確に意識化しながら回答させるために操作であり、本研究では分析しない。

b．親密感

質問項目は、ある特定の人物との親密さの強さを相対的にいくつかの親密段階に分類するため設定した。「想定した人物とは、どの程度親しいといえますか」という教示文を提示し、「1．極めて親しくない」、「2. かなり親しくない」、「3. 親しくない」、「4．やや親しくない」、「5. どちらともいえない」、「6. やや親しい」、「7．親しい」、「8．かなり親しい」、「9．極めて親しい」の9件法で回答を求めた。

親密感より親密段階を設定した。親密段階の分類に関しては、親密感評定値に基づいて、下斗米（1990）などと同様の方法を用いて、調査対象者を関係初期段階、関係中期段階、関係後期段階と3段階に分類した。親密感評定で1～6と回答した人物を関係初期段階、7と回答した人物を関係中期段階、8～9と回答した人物を関係後期段階と定義した。

c. 自己開示量

下位尺度は、「友人・人格」「能力・学業」「生活」「恋愛」「趣味」の5項目に設定し、丹野・下斗米・松井（2005）らの作成した7領域30項目からなる自己開示質問紙を参考に、各領域から3～4項目を抽出したものと、女子大学生5名の自由記述により5領域30項目から作成した（Table 1）。「以下の話題について、想定した方と、ふだんどの程度話しているかお答えください」と教示文を提示し、「1.全く話していない」、「2. ほとんど話してはいない」、「3.どちらともいえない」、「4. かなり話している」、「5.十分に話している」の5件法で回答を求めた。

Table 1. 自己開示量尺度質問紙の項目

[想定する下位尺度1：人格・友人関係]
1 自分の性格（長所・短所）について
2 他の友人との関係に関する悩み事
3 自分の考えや感じ方について
4 現在抱えている悩み事について
5 他の友人に関する好き嫌いについて
6 自分のその時々の喜びについて

[想定する下位尺度2：能力・学業]
1 学校の成績について
2 学校に対する不満について
3 自分の特技について
4 持っている資格や免許
5 ★政治について
6 ★社会の状況に対する不安について

[想定する下位尺度3：生活]
1 自分の親や兄弟のことについて
2 過去の病気や怪我について
3 理想の家庭像について
4 家庭内での自分のことに関して
5 幼少期の出来事について
6 ★将来の期待や不安について

[想定する下位尺度4：恋愛]
1 これまでの恋愛体験について
2 異性関係に関する悩みごと
3 異性の好みについて
4 異性に求める性的欲求について
5 片思いの相手や恋人との出来事（のろけ話について）
6 ★就きたい職業について

[想定する下位尺度5：趣味]
1 好きな音楽や映画について
2 趣味について
3 休日の過ごし方について
4 好きな芸能人について
5 ★1日のメール内容について
6 ★自分の容姿について

※ ★はダミー項目（下位尺度とは全く関係ない質問項目）

(2) 孤独感尺度

既存尺度に関しては、改訂版 UCLA 孤独感尺度日本版（諸井　1991）を用いた（Table 2）。ラッセルら（1978；1980 など）は孤独感を「人間関係の中でわれわれがこうありたいという願望があるとき、その願望が十分に満たされなかったり、逆に心理的な満足感を低下させるような結果が生じた時に感じる感情の一つ」と定義した。孤独感を状況観点から発生し、単一次元で構成される感情であるととらえ UCLA 孤独感尺度を作成した。「1 から 20 までの文章に述べられているそれぞれのことがらを、日頃あなたはどれくらい感じていますか」と教示文を提示し、「1．けっして感じない」、「2．どちらかといえば感じない」、「3．どちらかといえば感じる」、「4．たびたび感じる」の 4 件法で回答を求めた。

Table 2.　孤独感尺度の項目

★は逆転項目

1 ★私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている。
2 私は、人とのつきあいがない。
3 ★私には、頼りにできる人がだれもいない。
4 ★私は、ひとりぼっちではない。
5 ★私は、親しい仲間達のなかで欠くことのできない存在である。
6 ★私は、自分の周囲の人たちと共通点が多い。
7 私は、今誰とも親しくしていない。
8 私の興味や考え方は、私の周囲の人たちとはちがう。
9 ★私は、外出好きの人間である。
10 ★私には、親密感の持てる人たちがある。
11 私は、無視されている。
12 私の社会的なつながりはうわべだけのものである。
13 私はよく知っている人はだれもいない。
14 私は、他の人たちから孤立している。
15 ★私は、望むときにはいつでも人とつきあうことができる。
16 ★私には、私を本当に理解してくれる人たちがいる。
17 私は、たくさん引っ込み思案なのでみじめである。
18 私には、知人はいるが、私と同じ考えの人はいない。
19 ★私には、話しかけることのできる人たちがいる。
20 ★私には、頼りにできる人たちがいる。

3.　手続き

質問紙を講義時間中に配布し、集団法にて実施した。調査期間は 2010 年 6 月 2 日であった。質問紙調査の実施前に、調査の目的、プライバシーの保護、調査方法、調査結果の取り扱いに関して説明し、承諾した場合のみ調査に回答するように求めた。所要時間は 20 分であった。

V．結果

(1)　女子大生の同性の友人関係における自己開示量尺度の因子分析の結果について

尺度項目の平均値と標準偏差値を算出し分析を行った。女子大生の同性の友人関係における自己開示量の項目間に天井効果が見られたものは「政治について」、「異性の好みについて」の 2 項目であった。また、フロア効果に該当する項目はみられなかった。天井効果が見られた 2 項目に関しては、分析に必要と判断したため削除は行わなかった。

次に、30 項目に対して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。初期の固有値の変化は 9.86、2.39、1.85、1.59、1.33、1.14 であった。累積寄与率は 55.73%であった。

項目分析を行った結果、十分な因子負荷量 0.35 を基準として、基準を下回る項目は、因子に影響を与える大きさが少ないため、該当する 4 項目「1 日のメール内容について」、「自分の特性について」、「理想の家庭像について」、「過去の病気や怪我について」を除外し 5 因子を抽出した。最終的に因子分析で得られた各因子パターンを Table 3 に示した。

Table3. 女子大生の同性の友人関係における自己開示量の因子分析の結果（主因子法・Promax回

	因子				
	恋愛	生活	人格	社会	趣味
9. 異性関係に関する悩みごと	.88	-.21	.14	.07	-.04
27. これまでの恋愛体験について	.86	-.12	.13	-.15	.00
28. 異性の好みについて	.77	.06	.04	-.17	.17
4. 片思いの相手や恋人との出来事（のろけ話について）	.76	-.23	.12	.12	.01
22. 学校の成績について	.51	.24	-.31	.05	.00
14. 異性に求める性的欲求について	.49	.09	.05	.01	-.14
29. 好きな芸能人について	.41	.09	.08	.02	.19
19. ＊1日のメール内容について	-.33	-.06	-.03	-.29	.13
7. 自分の親や兄弟のことについて	-.19	.76	.13	.00	.14
15. 家庭内での自分のことに関して	-.14	.71	.02	.18	-.05
20. ＊自分の容姿について(※)	-.33	-.56	.08	.13	-.03
30. 他の友人に関する好き嫌いについて	.17	.47	.32	-.14	-.38
21. 持っている資格や免許	-.06	.44	-.09	.19	.17
5. 幼少期の出来事について	.04	.41	.18	.13	-.11
1. 学校に対する不満について	.31	.37	-.10	-.23	.21
13. 自分の特技について	-.12	.27	.21	.20	.04
23. 自分の考えや感じ方について	.13	-.02	.71	-.14	.21
10. 休日の過ごし方	.11	-.18	.54	.17	.08
11. 自分のその時々の喜びについて	-.11	.22	.48	-.22	.22
12. 他の友人との関係に関する悩みについて	.25	.17	.48	-.01	-.12
17. 自分の性格（長所・短所）について	.02	.29	.41	.08	.10
18. 現在抱えている悩み事について	.29	.08	.37	.15	-.02
3. 理想の家庭像について	.22	.18	.25	.18	.09
12. ＊政治について	.09	.05	.08	-.69	.04
17. ＊社会の状況に対する不安	.13	-.13	-.14	-.65	-.08
18. ＊将来の期待や不安	-.14	-.17	-.05	-.48	-.17
3. ＊就きたい職業について	-.29	-.19	.28	-.44	.01
2. 過去の病気や怪我について	.14	-.08	.30	.33	.03
24. 趣味について	-.17	-.03	.45	.00	.69
26. 好きな音楽や映画について	.20	.14	.00	.09	.59

＊ ダミー項目　※α係数算出後に削除した項目

第 1 因子では、「異性関係に関する悩みごと」、「これまでの恋愛体験について」、「異性の

好みについて」、「片思いの相手や恋人との出来事（のろけ話について）」、「学校の成績について」、「異性に求める性的欲求について」、「好きな芸能人について」の 7 項目で構成されており、異性との恋愛に関する項目が示されたため因子名を「恋愛」とした。

第 2 因子では、「自分の親や兄弟のことについて」、「家庭内での自分のことに関して」、「他の友人に関する好き嫌いについて」、「持っている資格や免許について」、「幼少期の出来事について」、「学校に対する不満について」の 6 項目で構成されており、家族や学校に関連する項目が示されたため因子名を「生活」とした。

第 3 因子では、「自分の考え方や感じ方について」、「休日の過ごし方について」、「自分のその時々の喜びについて」、「他の友人との関係に関する悩み事について」、「自分の性格（長所・短所）について」、「現在抱えている悩み事について」の 6 項目で構成されており、自己に関する項目が示されたため因子名を「人格」とした。

第 4 因子では、「政治について」、「社会の状況に対する不安について」、「将来の期待や不安について」、「就きたい職業について」の 4 項目で構成されており、政治や将来についての項目が示されたため因子名を「社会」とした。

第 5 因子では、「趣味について」、「好きな音楽や映画について」の 2 項目で構成されており、趣味についての項目が示されたため因子名を「趣味」とした。

(2)　自己開示量尺度の総得点および下位尺度間の関連について

自己開示量尺度の 5 つの下位尺度に相当する項目の平均値、SD、相関係数、α係数を算出して Table4 に示した。各下位尺度の平均値と SD において、「恋愛」下位尺度得点（平均 3.37、SD.91）、「生活」下位尺度得点（平均 3.33、SD.73）、「人格」下位尺度得点（平均 3.65、SD.73）、「社会」下位尺度得点（平均 3.43、SD.85）、「趣味」下位尺度得点（平均 3.76、SD.91）とした。

5 つの下位尺度の関連を検討するために相関係数を算出したところ、「恋愛」下位尺度と「人格」下位尺度間では r=.61、「生活」下位尺度と「人格」下位尺度間では r ＝.60、「生活」下位尺度と「恋愛」下位尺度間では r ＝.50、「人格」下位尺度と「趣味」下位尺度間では r ＝.44、「生活」下位尺度と「趣味」下位尺度間では r ＝.30、「恋愛」下位尺度と「趣味」下位尺度間では r ＝.27、「社会」下位尺度と「生活」下位尺度間では r ＝－.50、「社会」下位尺度と「人格」下位尺度間では r ＝－.49、「恋愛」下位尺度と「社会」下位尺度間では r ＝－.39、「社会」下位尺度と「趣味」下位尺度間では r ＝－.29 であった。これより、「恋愛」下位尺度と「人格」下位尺度間、「生活」下位尺度と「人格」下位尺度間では強い正の相関がみられ、「恋愛」下位尺度と「人格」下位尺度間、「生活」下位尺度と「人格」下位尺度間では負の相関がみられた結果となった。

内的整合性の検討をするために各下位尺度のα係数を算出したところ、「恋愛」ではα＝ .86、「人格」ではα＝ .80、「社会」ではα＝ .74、「趣味」ではα＝ .89 と十分な値が得られた。「生活」ではα＝ .52 と低かったため、「自分の容姿について」の項目を削除し、再度内的整合性の検討を行ったところ、α＝ .74 と十分な値が得られた。

Table 4. 自己開示量の下位尺度間相関と平均、SD、α係数

	恋愛	生活	人格	社会	趣味	平均	SD	α
恋愛		.502**	.616**	−.390**	.272**	3.37	0.91	0.86
生活	.502**		.608**	−.505**	.308**	3.33	0.73	0.74
人格	.616**	.608**		−.496**	.442**	3.65	0.73	0.80
社会	−.390**	−.505**	−.496**		−.295**	3.43	0.85	0.74
趣味	.272**	.308**	.442**	−.295**		3.76	0.91	0.89

**p<.01, *p<.05

(3) 各親密段階における自己開示量の関連について

自己開示量と親密段階間で差があるかどうかを一元配置分散分析と Tukey の多重比較を行い検討した。その結果、自己開示量が、初期段階より中期段階、中期段階よりも後期段階の値が高かったのは、「恋愛」下位尺度得点（平均 3.71、SD .79)、「生活」下位尺度得点（平均 4.33、SD .92)、「人格」下位尺度得点（平均 3.93、SD .63)、であった。一方、「社会」下位尺度得点においては、後期段階よりも中期段階、中期段階よりも初期段階の値が高く、平均 3.94、SD .83 であった。「趣味」下位尺度得点において、F 値では有意差がみられたが、多重比較では有意差がみられなかった。各親密段階における自己開示量の平均値、標準偏差、F 値、多重比較結果を Table 5 に示した。

Tabel 5 各親密段階の自己開示量

	初期段階	中期段階	後期段階			多重比較結果
	n=16	n=42	n=62			
	平均(標準偏差)	平均(標準偏差)	平均(標準偏差)	F値		
恋愛	2.52(.76)	3.19(.87)	**3.71(.79)**	14.99	**	初<中<後
生活	2.94(.89)	3.72(1.02)	**4.33(.92)**	14.99	**	初<中<後
人格	3.01(.79)	3.49(.64)	**3.93(.63)**	14.63	**	初<中<後
社会	**3.94(.83)**	3.38(.81)	3.32(.86)	3.53	*	初>後
趣味	3.53(1.01)	3.55(.88)	**3.96(.87)**	3.28	*	

多重比較結果（Tukey法、5%水準）は、初期段階、中期段階、後期段階を比較し、差がみられたものを不等号で示した。F値（df=2）、**p < .01、 *p < .05

(4) 女子大生の同性の友人への自己開示尺度と孤独感の関連について

孤独感尺度の平均値を算出し、「孤独」下位尺度得点(平均 39.56, SD 3.81)とした。内的整合性を検討するために検討するために、下位尺度のα係数を算出したところ、「孤独」でα = .89 で十分な結果が得られた。

また、女子大生の同性の友人への自己開示量の下位尺度と孤独感尺度の相関関係を確認するため、相関係数を求め table 6 に示した。その結果、「恋愛」尺度と孤独感の間には r =

－.27、「生活」尺度と孤独感の間には r＝－.27、「人格」尺度と孤独感の間には r＝－ .28、「社会」尺度と孤独感の間には r＝.09、「趣味」尺度と孤独感の間には r＝ －.18 であった。

Table6．女子大生における同性の友人に対する自己開示量の下位尺度と孤独感間の相関係数

	恋愛	生活	人格	社会	趣味
孤独感	-.273**	-.273**	-.285**	.097	-.186*

**p<.01　*p<.05

女子大生における同性の友人に対する自己開示量の下位尺度において、「恋愛」、「生活」、「人格」、「趣味」と孤独感との間に負の相関がみられた。また、「社会」と孤独感の間には相関がみられなかった。

Ⅵ. 考察

(1) 女子大生の同性の友人関係における自己開示量尺度の因子分析の結果について

今回の作成した尺度では、2 項目の天井効果がみられた。「政治について」は「学業・能力」の下位尺度のダミー項目として作成したものであった。女子大生は政治について関心がないと考えていたが、最近では政権交代や選挙などの話題が多くマスコミが取り上げているため、マスコミの影響によって友人と政治について話す機会が増えたのではないかと考えられた。「異性の好みについて」の項目は「恋愛」の項目として作成した。友人同士で自己の恋愛を自己開示することによって、友人関係が親密化し、さらに、「異性の好み」という話題は、自分の好みを恋人や好きな芸能人に当てはめて友人に教えることができ自己開示しやすいので、天井効果がみられたのではないかと推測された。一方、ダミー項目が第 4 因子にほとんど入ったため、フロア効果はみられないと考えられた。

女子大生の友人関係における自己開示量尺度の因子分析の結果、仮説として立てた 5 因子構造はほぼ認められた。まず、「恋愛」「生活」「趣味」を表す 3 因子が抽出された。また、仮説で立てた「人格・友人関係」の因子はみられず、「人格」のみのまとまった因子として抽出された。友人関係の因子が抽出されなかったのは、質問項目が友人関係に関する悩みや好き嫌いなどといった友人関係のネガティブな側面の項目のみであったこと、また友人関係の質問項目が少なかったことが理由として考えられた。「能力・学業」の因子もみられず、すべてダミー項目の因子「社会」が抽出された。これより、「恋愛」「生活」「人格」「社会」「趣味」の 5 因子構造が抽出される結果となった。

第 1 因子について、「異性関係に関する悩み」の自己開示量が多いのは、異性についての悩み事は、同性にしたほうが理解してもらえたり、同意してもらえたり、適切なアドバイスをもらえるためであると考えられた。また、親や異性には言いにくいこともあると考えられるため、同性の友人に相談することが多くなるのではないかと考えられた。

また、「これまでの恋愛経験について」の自己開示量が多いのは、同じような経験をして

いる同性の友人のほうが、自分の経験に同意してもらえたり、友人自身の同じような経験を聞けたりするためではないかと推測される。

第2因子について、「自分の親や兄弟のことについて」と「家庭内での自分のことについて」の自己開示量が多いのは、自分のことを相手に知ってもらうために話題にする事柄が、気軽に話題に出しやすい家族のことや、家庭内のことであると考えられた。

第3因子について、「自分の考えや感じ方について」の自己開示量が多いのは、友人に自分のことについて知ってもらうために、自分はこの時はこう考える、このように感じると言ったことを伝えるためだと考えられた。また、「休日の過ごし方について」の項目は人格よりも第 2 因子の「生活」の内容にも受け取れるが、休日の過ごした時間から感じた事などを話していると推測される。

第4因子について、「政治について」と「社会の状況に対する不安について」の自己開示量が多いのは、自己開示というよりは、友人の親密度に関わらず、誰に対しても話せる内容だからであると考えられた。

第5因子について、「趣味について」の自己開示量が多いのは、友人と話をするきっかけとして、自分の趣味について話すことが多いと推測される。趣味が合えば会話が盛り上がり、新たな共通点を発見することが可能となり、それほど親しくない友人から、かなり親しい友人まで、誰とでも話しやすい内容であると示唆された。

(2) 自己開示量尺度の総得点および下位尺度間の関連について

「恋愛」と「人格」の項目間において正の相関がみられたのは、恋愛の話をすることによって、人との付き合い方や価値観、性格などその人の人となりが垣間見えるからではないかと考えられた。

「生活」と「人格」の項目間において正の相関がみられたのは、生活の話をすることによって、どのような生活をしているか、家族がどのような人なのか把握することができ、それによって相手の人格が垣間見えることができると考えられた。あるいは、家庭環境や幼少期の出来事を自己開示することによって、自分の内面的な人格が相手に伝わっていくのを躊躇しているとも推測された。

「社会」と「生活」、「社会」と「人格」の項目間において負の相関がみられたのは、「社会」の質問項目からではその人の「生活」や「人格」に繋がるような話の内容にならないからではないかと考えられた。

「趣味」の項目は、自己開示量尺度の 5 つの下位尺度の平均値の中で最も高かった。趣味や好きな音楽や映画に関しては自己開示量が多く、気軽に話すことができると考えられた。また、お互い趣味や好きな音楽、映画が共通する部分でもあり話しやすいと考えられた。

(3) 各親密段階における自己開示量の関連について

「恋愛」「生活」「人格」の 3 因子において、初期段階より中期段階、中期段階より後期段階の値が高かったことから、親密感が高いほど自己開示が高く、親密感が低いほど自己

開示が低いという仮説は指示されたといえた。3因子の項目内容から自己開示内容が個人的な内容のため、親密感が高くないと開示しにくいと考えられた。

しかし、「社会」因子は、初期段階の値が最も高く、親密感が低くても自己開示するとわかった。「社会」因子に含まれる質問項目はダミー項目で取り入れたもので因子が構成され、政治など社会的な内容のため、個人的な内容でなく個人の意見や考えが話の内容になることから親密段階が初期段階でも話しやすいことが推測された。

(4)　女子大生の同性の友人への自己開示尺度と孤独感の関連について

自己開示量下位尺度と孤独感尺度の相関係数は、「恋愛」、「生活」、「人格」、「趣味」において負の相関がみられた。この結果は、先行研究（Chelune, Sultan, & Williams, 1980; Berg & Peplau, 1982；榎本, 1997）とも一致した。つまり、「恋愛」、「生活」、「人格」、「趣味」の領域の自己開示量が低いほど、孤独感が高くなると考えられた。この点に関しては仮説が支持された。一方、「社会」においては相関がみられず、「社会」領域の自己開示量と孤独感には特に関係性はないと考えられた。よって、仮説は支持されなかった。

各親密段階の自己開示量の結果より、「社会」領域の自己開示量は、親密感がそれほどない相手に対して「かなり話している」ことがわかった。この結果より、「社会」領域の自己開示はあまり親しくない友人のほうが、話題提供として開示しやすいため、孤独感も特に感じないのではないかと推測された。それに対して、「恋愛」、「生活」、「人格」、「趣味」の領域は、親密感がかなり親しい、極めて親しい友人に対して「かなり話している」、「十分に話している」ため自己開示量が多い傾向であった。そのため、自己開示量が少なくなると、孤独感を感じやすくなるのではないかと推測された。

Ⅶ. 総合討論

本研究では、女子大生の友人関係において各親密段階における自己開示の機能と、自己開示量と孤独感との関連性について検討を行うために、2つの仮説を立て検証を行った。

第一に、友人関係における親密感が高いほど自己開示量が高く、親密感が低いほど自己開示量が低いと仮説を立てた。「恋愛」、「生活」、「人格」、領域に関しては親密感が高いほど、自己開示量が高いという仮説は支持された。しかし、「社会」領域に関しては、親密感が低いほど自己開示量が高い結果となり、仮説は支持されなかった。「社会」領域の自己開示量は、それほど親密でない相手には話しやすい「話題提供」として捉えていると推察された。

先行研究との比較に関しては、下斗米（1990）と同様、「恋愛」、「人格」に関して自己開示量が多い点は認められた。しかし、「生活」領域に関して家族の話題を自己開示する傾向がみられた。この結果は、榎本（1987）の家族に関する領域の自己開示量が少ない結果と一致せず本研究では認められなかった。

第二に、友人関係での自己開示量が多いほど孤独感が低く、自己開示量が低いほど孤独感が高いと仮説を立てた。「恋愛」、「生活」、「人格」、「趣味」領域では、負の相関がみられた。Chelune, Sultan, & Williams（1980）、Berg & Peplau（1982）、榎本（1997）と同様、

自己開示量の低いほど、孤独感を強く持っていることが認められ仮説は支持された。しかし、「社会」領域に関しては相関がみられず仮説は支持されなかった。親密段階と自己開示量の結果を含め、親密感が低い相手でも自己開示ができる領域であり、相手に自己開示量が少ないからといって孤独感を感じることはないと推察された。

自己開示尺度を作成した際に、質問項目に逆転項目でなくダミー項目を作成した。ダミーに関しては、政治・社会・今後の進路に関する項目内容とした。分析の結果において、ダミー項目からフロア効果が抽出され、「社会」領域としてダミー項目で形成される結果となり、当初の予測とは違い、女子大生が「社会」について親密段階に関係なく話している結果となった。

Ⅷ. 今後の課題

本研究では、女子大生の同性の友人関係において自己開示による親密感と孤独感の関連について、先行研究をもとに検討を行った。そのため、研究にオリジナリティを出す点に関しては欠如していると考えられた。先行研究をもとに、独自の考えを反映させる研究を行えるよう、更なる研究内容の検討が必要であると示唆された。

Ⅸ. 引用文献

安藤清志 (1999). 中島義明・子安増生・坂野雄二（編） 心理学辞典 有斐閣 pp. 456-548.

Berg, J. H., Peplau, L. A. (1982) Loneliness: The relationship of self-disclosure and androgyny. *Personality and Social Psychology Bulletin,* 8, 624-630.

Cheiune, G.j., Sultan, F. E., & Williams, C. L. (1980) Loneliness, self-disclosure, and interpersonal effectiveness. *Journal of Counseling Psychology,* 27, 462-468

榎本博明 (1987). 青年期（大学生）における自己開示性とその性差について 心理学研究, 58, 97-97.

榎本博明 (1997). 自己開示の心理学研究 北大路書房

Jourand, S.M. 1971 *Self-disclosure: An experimental analysis of the transparent self.* New York: John Wilex & Sons. (岡堂哲雄（訳） 1974 透明なる自己 誠信書房)

下斗米淳 (1990). 対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化 学習院大学文学部研究年報, 37, 268-287.

丹野宏昭・下斗米淳・松井豊 (2005). 親密化過程における自己開示機能の探索的検討－自己開示に対する願望・義務感の分析から－ 対人社会心理学研究, 5, 67-75.

丹野宏昭・松井豊 (2006). 大学生における友人関係機能の探索的検討 筑波大学心理学研究, 32, 21-30.